

〔研究ノート〕

流通科学部2013年度入学生のプレイスメント・テスト報告

Placement Test Report of the 2013 Student

中村学園大学 基礎教育センター

柳 瀬 尚 司・居 村 俊 子・落 合 淳一郎

小 山 謙 一・山 口 尚 子

中村学園大学 流通科学部

福 沢 健・木 下 和 也

池 田 祐 子・音 成 陽 子

1. 概要

流通科学部2013年入学（以下13B）の学生を対象にプレイスメント・テスト（以下、テスト）を行った。1年時は2013年4月に必修科目のアカデミックリテラシーにおいて、3教科281名に実施した。2年時は2014年4月に選択科目のベーシックスタディⅠ（日本語）において、国語205名、数学204名、英語207名に実施した。問題のレベルは、2013年は大学入試レベルの外部委託問題であり、2014年は基礎教育センター作成による基本確認を重視した問題である。

基礎教育センターによるサポート講座は2013年6月・7月に実施をした。テストにおいて、国語と数学は評価C－・D＋・D－（国語85名、数学226名）の学生を対象に2回、英語は評価C－は希望者のみ、D＋・D－（英語83名）の学生を対象に4回実施した。個別指導利用者については、データを集計するにあたり、2013年4月から2014年3月の期間において基礎教育センターを1回以上利用した学生を対象としている。

国語、数学、英語の2013年テスト結果、2014年テスト結果をヒストグラム（縦軸：人数、横軸：5点刻み得点）に示した。国語、数学、英語のいずれの科目においても、2013年テストで

下位層に集中していたサポート講座受講者が、2014年テストでは全体に散在がみられた。

そこで、2013年と2014年の両テストを受けた学生を対象に指導状況による変化を報告する。国語・数学・英語のそれぞれの指導状況について、サポート講座受講および個別指導の利用者をⅠ群、サポート講座受講のみをⅡ群、個別指導のみをⅢ群、講座および指導を受けていないⅣ群と区分して検討を行った。テストの難易度および設問設定が異なるため、2014年テストの得点から2013年テストの得点を差し引いた得点（2014－2013得点差）を用いることとした。

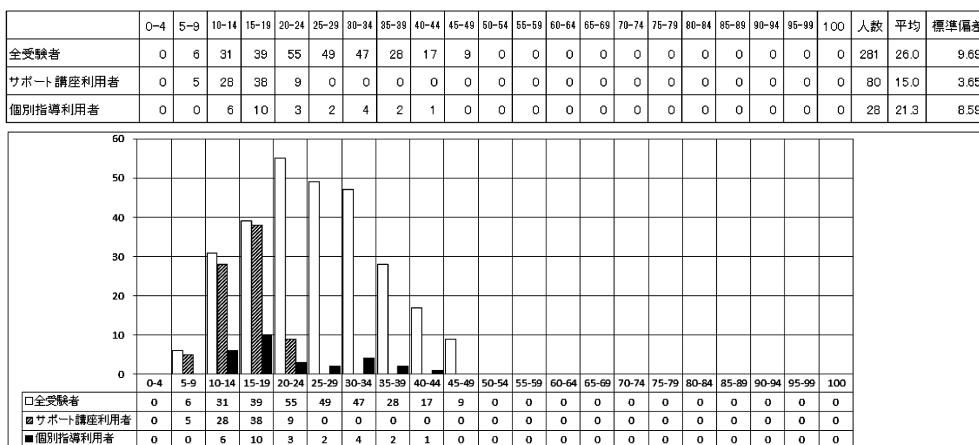
2. 国語

国語の2013年テストの結果を図表1に、2014年テストの結果を図表2に示す。2013年テストの平均は 26.0 ± 9.7 点、サポート講座受講者においては 15.0 ± 3.7 点であった。2014年テストの平均は 65.4 ± 12.0 点、サポート講座受講者においては 61.2 ± 12.4 点であった。サポート講座では漢字・語句の演習を繰り返し習得させていった。個別指導では文章作成力やSPI基礎の指導などを行った。サポート講座の受講者や個別指導の利用者をみると、2014年テストの結果で

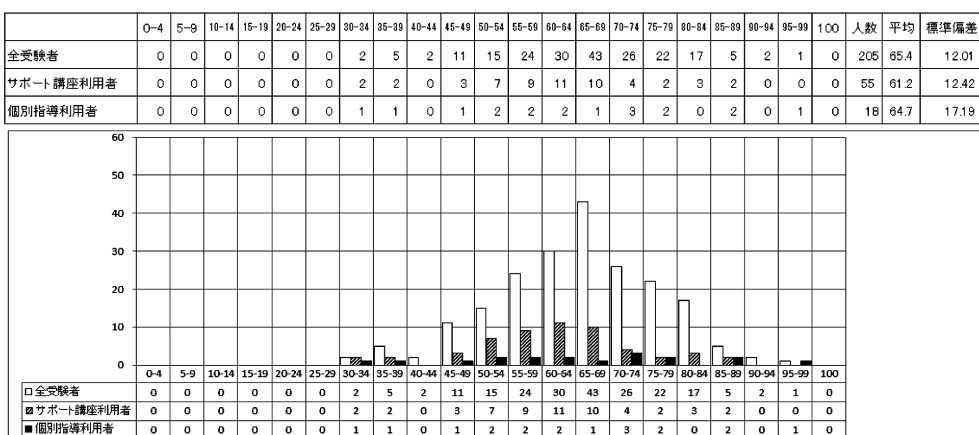
は全体に分布した。図表 3 は指導状況別の 2014－2013 得点差分布を示したものである。講座・指導を受けた学生の方が、講座・指導を受けなかった学生よりも 2014－2013 得点差が高くなる傾向がみられた。

指導状況別の 2014－2013 得点差は図表 4 に示すとおり、I 群（14 人） 44.7 ± 15.9 点、II 群（41

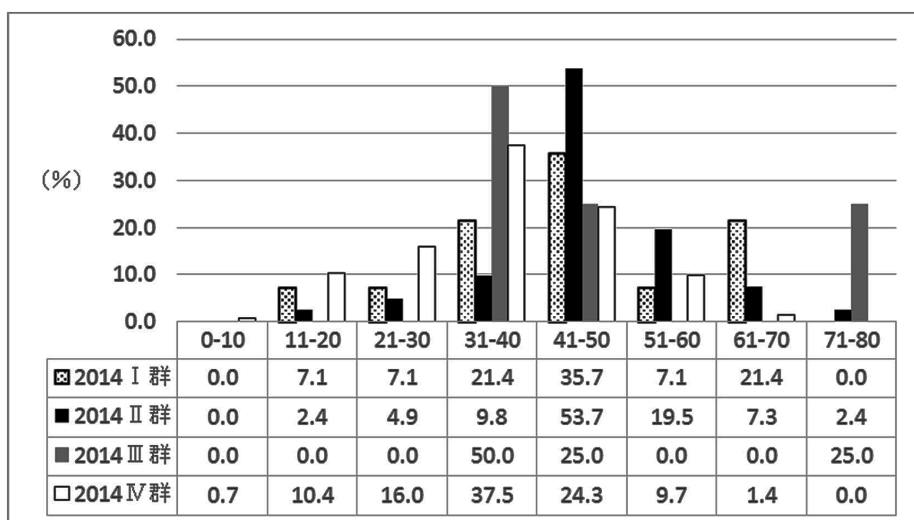
人） 46.9 ± 10.8 点、III 群（4 人） 45.8 ± 18.4 点、IV 群（144 人） 36.2 ± 11.7 点だった。Tukey-Kramer の HSD 検定を使ったすべてのペアの比較を行ったところ、II 群と IV 群において、 $p < 0.05$ で有意な差がみられた。



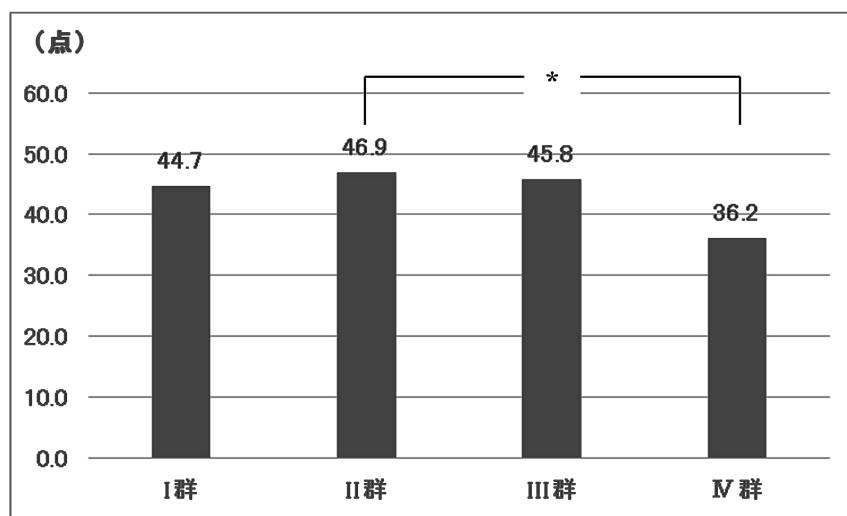
図表 1 国語（2013. 4 実施）



図表 2 国語（2014. 4 実施）



図表 3 2014－2013得点差分布（国語）

図表 4 指導状況別の2014－2013平均得点差（国語） * : $p < 0.05$

3. 数学

数学は2013年テストの難易度が高く点数が取れていなかった。しかし、2014年テストでは、基礎レベルの問題としたため分布幅が広がった。数学の2013年テストの結果を図表5に、2014年テストの結果を図表6に示す。2013年テストの

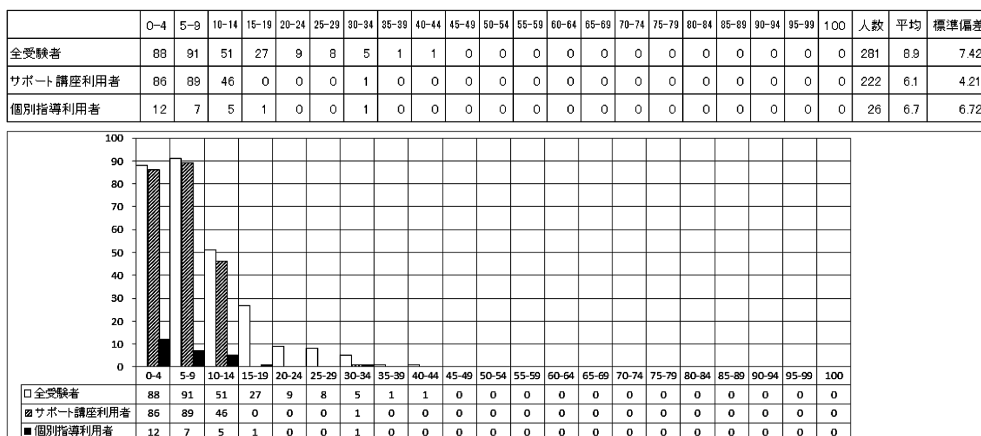
平均は 8.9 ± 7.4 点、サポート講座受講者においては 6.1 ± 4.2 点であった。2014年テストの平均は 45.8 ± 14.0 点、サポート講座受講者においては 44.4 ± 14.2 点であった。

サポート講座では算数・数学の基礎の確認テストおよび解説を行い、個別指導ではSPIを

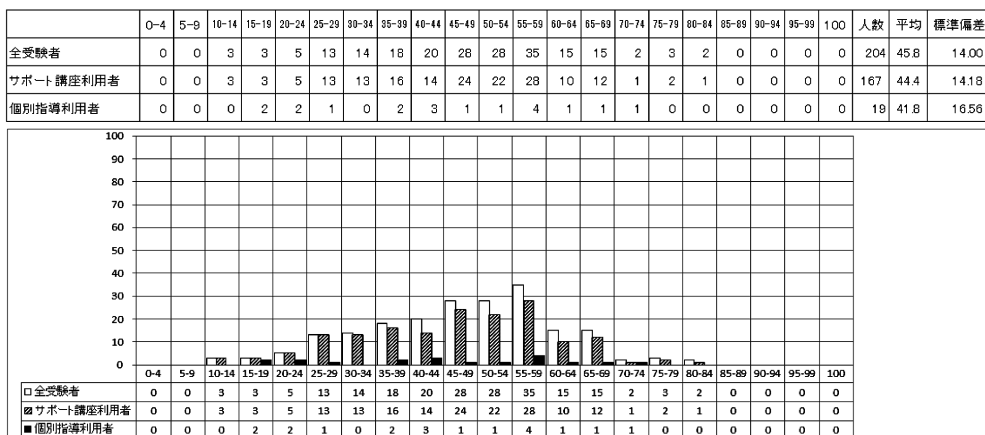
見据えた内容を中心に基礎の指導を行った。サポート講座の受講者および個別指導利用者は全体的な広がりを見せた。図表 7 は指導状況別の 2014－2013 得点差分布を示したものである。高校 1 年あるいは 2 年までで数学を受講していない学生も存在することを考慮すると、基礎学力の定着には時間を要することが考えられる。

指導状況別の 2014－2013 得点差は図表 8 に示

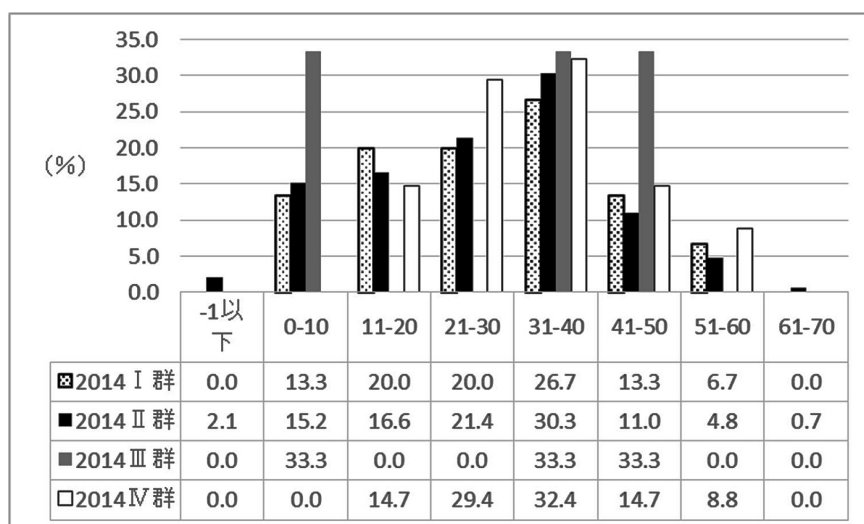
すとお、I 群（15 人） 27.5 ± 13.2 点、II 群（145 人） 27.8 ± 14.5 点、III 群（3 人） 26.3 ± 21.2 点、IV 群（34 人） 33.1 ± 11.7 点だった。Tukey-Kramer の HSD 検定を使ったすべてのペアの比較を行ったところ、有意な差はみられなかった。



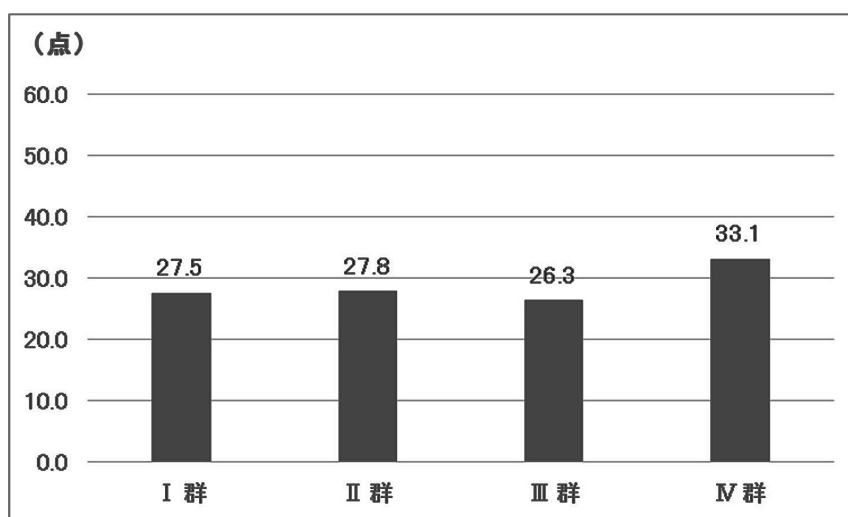
図表 5 数学（2013. 4 実施）



図表 6 数学（2014. 4 実施）



図表 7 2014－2013得点差分布（数学）



図表 8 指導状況別の2014－2013平均得点差（数学）

4. 英語

英語は2013年テストと2014年テストを比較すると、入試レベルの問題から基礎問題にとなったため、サポート講座出席者および個別指導利用者のいずれも分布幅が広がった。英語の2013年テストの結果を図表9に、2014年テストの結果を図表10に示す。2013年テストの平均は17.1

±7.9点、サポート講座受講者においては9.5±4.1点であった。2014年テストの平均は53.8±13.3点、サポート講座受講者においては49.6±11.7点であった。

サポート講座では中学から高校1年までの内容の復習を行い、個別指導では主にTOEICを見据えた基礎内容を指導した。図表11は指導状

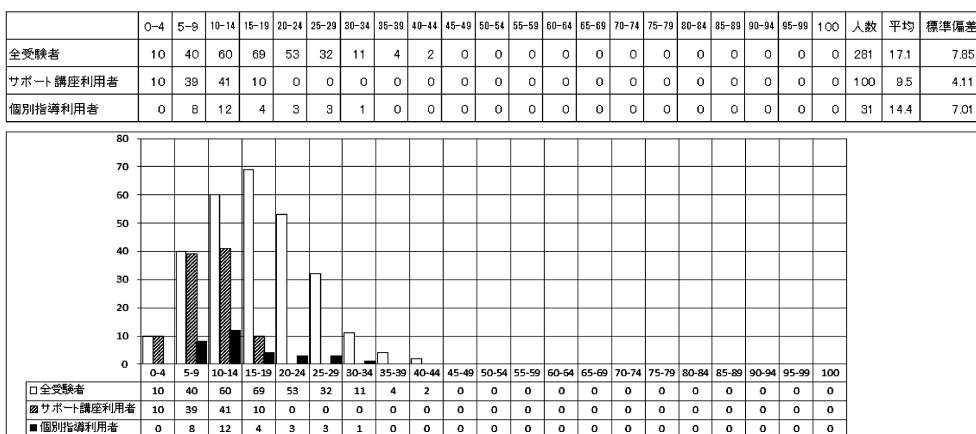
況別の2014－2013得点差分布を示したものである。英語は必修科目が週2コマ開講されていることもあり、指導状況だけでない要因が考えられる。

指導状況別の2014－2013得点差は図表12に示すとおり、I群（16人） 44.8 ± 13.2 点、II群（58人） 42.1 ± 14.5 点、III群（6人） 48.8 ± 21.2 点、IV群（125人） 46.6 ± 11.7 点だった。Tukey-KramerのHSD検定を使ったすべてのペアの

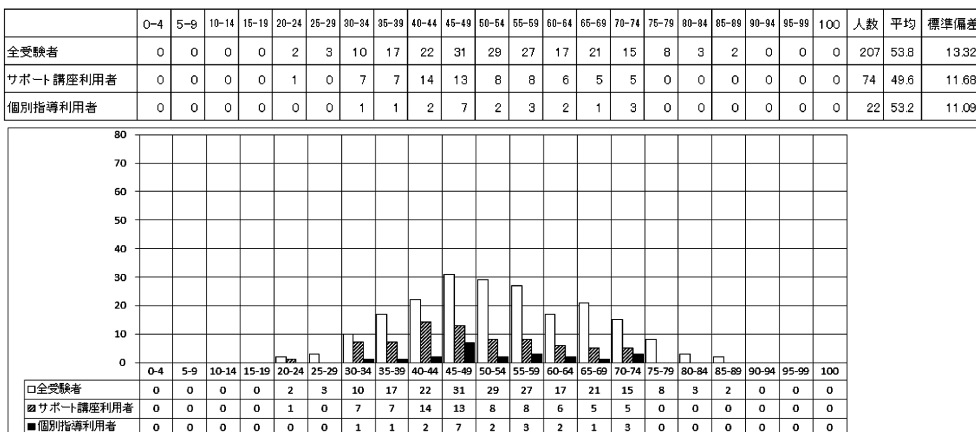
比較を行ったところ、有意な差はみられなかった。

5. まとめ

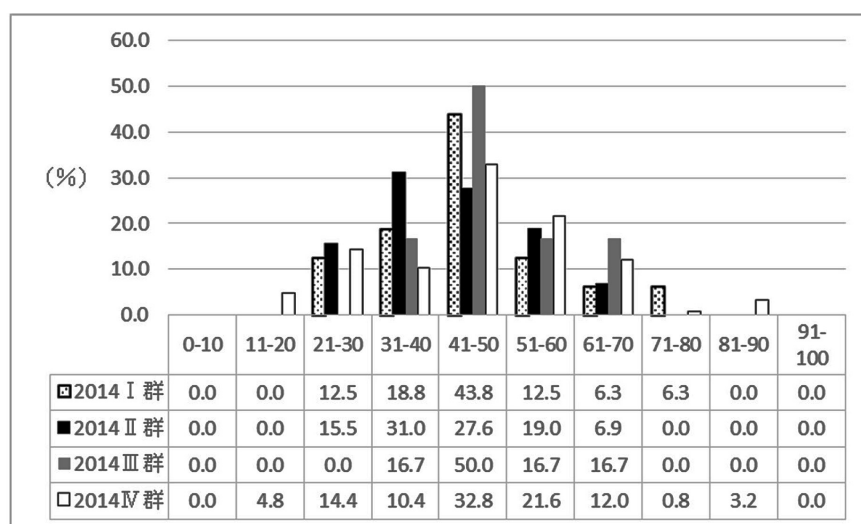
流通科学部13Bの学生における、2013年および2014年のプレイスメント・テストの結果を報告する。2013年度テスト結果から得点の低い学生はサポート講座を受講し、さらに自主的に個別指導を受けることで基礎学力の向上を行った。



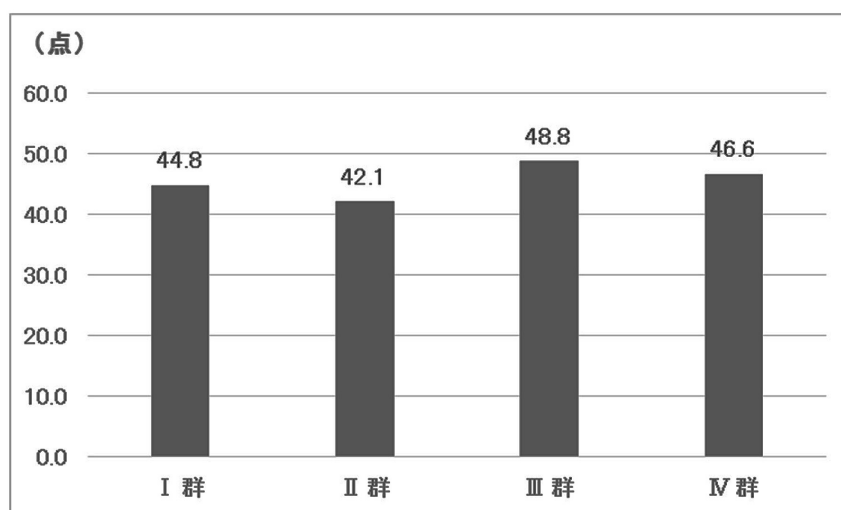
図表9 英語（2013.4実施）



図表10 英語（2014.4実施）



図表11 2014－2013得点差（英語）



図表12 指導状況別の2014－2013平均得点差（英語）

国語においてサポート講座と個別指導の両方を受けた学生は、指導を受けなかった学生よりも2014－2013得点差が有意 ($p < 0.05$) に高かった。国語は他の2科目よりも平均点が高かったことから、問題の平易さが考えられる。加えて、大学入学後のレポート作成など高校時代よりも文章を読解し、作成する機会が多いことなどが

要因のひとつと考えられる。数学と英語については、入学前の修学と入学後の履修の状況が影響しているのではないだろうか。今後は、プレイスメント・テストのあり方、指導方法、指導内容などを精査して学生の基礎学力向上に努める必要があるだろう。